

第3学年「タグラグビー」の実践を通して

江府町立江府小学校 永岡 康隆

1. タグラグビーの運動特性

- どの子もいま持っている力で楽しむやさしい学習を導きやすい
- 小さな子どもたちが大好きな鬼遊び（鬼ごっこ）と深く関連する
- 豊富な運動量と方向やスピードを変えるなど多様な動きをすることによって、敏捷性やバランス感覚が得られる

2. 児童の実態

本学級の児童は、体育が好きな児童が多く、体育学習に意欲的に取り組んでいる。しかし、アンケート調査から、「ボールを使った運動が好き」と答えた児童は14人中10人で、4人の児童はボールを使った運動やゲームに苦手意識を持っている。

3. 研究の実際

（1）主運動につながる準備運動の工夫

【ボール集め競争】…ボールを運ぶ、パス・キャッチの技能を高めるために、リレー形式で自陣にボールを集めていく活動を行った。

【円陣パス】…最初は向かい合って、次に背中合わせで行う。背中合わせで行うことで、パスを投げる側、受ける側が体の向きを相手に向けることを意識できる。また、体を反転させ自分の後へパスをする動きはゲームに繋がる動きになっていった。

【チーム対抗タグとり鬼】…タグをとる感覚を身につけるとともに、相手を見ながら動く力がつくため、鬼ごっこ形式で行った。また、チーム対抗にすることでチームプレーの楽しさや面白さを感じることができた。



（2）技能の向上を意図したドリルゲーム・タスクゲーム

【1対1】…相手を抜く感覚や楽しさを味わうために、1対1でトライするゲームを行った。相手を抜くための動きを身につけるとともに、友だちのランを見ることによって、素早い切り返しやフェイントを見て、自分の動きに生かすことができた。これにより、ゲームの中で相手を抜こうとする児童が増えた。

【2対1・3対2】…攻撃側に数的優位を作ることによって、相手を引きつけ、パスをし、広いスペースへ味方をランさせることのできる活動となった。これにより、味方からどんな場所でもらうとよいのか、どこにパスをすると得点につながるか分かり、その後ゲームの中でボールを持たない人の動きが活性化していった。

4. 成果と課題

【成果】様々なタスクゲームやドリルゲームを行うことで、児童が学習課題に沿ってボールを扱う技能や走りの技能を高めることができた。特に、1対1は、互いの動きを見ることで、児童同士でアドバイスが増え、より良い動きに繋がった。また、トライの回数をチームで競うことで協力して技能を高めていく喜びを感じながら学習を展開することができた。それにより、ボールを使ったゲームに苦手意識を持っていた児童も、タグラグビーに意欲的に取り組むことができた。

【課題】各時間の課題が児童の必要感に即したものと、全員が共通理解されていなかった時は、学習意欲や課題意識に繋がっていなかった。児童の必要感を生かして的確に次のめあてにつなげていくことが重要だった。